

お客さんを指差しながら勝ち誇った顔色を浮かべるリリエールに対し、扉とびらから飛び込んできたお客さんは、やや慌あわてきつているように見えた。

「リリエールさん！ 助けてくださね！ 吾輩わがはいとても困つておるのです！」

肩に大きなバッグを提さげたスーツ姿の壮年男性そうねんだった。過ぎしやすい春の朝方だというのに、男は真夏の日差しの中を急いできたみたいにならずいぶんと汗ばんでいる。「いらっしやい。とりあえずそこにどうぞ。お名前は？」

「カジノ店、ガットショットの支配人モリスです。今日は祈りを解いてもらいに来た次第しだいであります！」

妙みょうなテンションの男だった。

リリエールは顧客名簿こきやくめいぼにペンを走らせた。

「要件ようけんは？」

リリエールの言葉に、モリスこと支配人が応じる。

「店に魔法使いが現れたのであります！ ぜひとも助けてほしい」

「……魔法使い？」思わず僕は声をあげていた。

ふと気づくと、リリエールも涼すずし気な表情を崩くずしていた。²

「この国に魔法使いなんているはずないじゃないの」「びしやりと断言だんげんするリリエール。

けれどモリスこと支配人は頑かたくなだった。

「だが魔法使いが確かにいるのであります！ 魔法使いの

せいで、我が店は経営が傾かたむいているのですよー！」

必死な形相ぎょうそうの中に嘘うそはないように思えた。

だから僕もリリエールも怪訝けげんな表情で顔を見合わせた。

「……ところで今日来たお客さんも解呪かいじゆのお願いだったわけだけど」

「レアケースって続くものなのよ」

「私が運営するカジノにその女が現れたのは二日ほど前のことでもあります！」

支配人が語り、リリエールがペンを走らせながら時折頷うなずいていた。

妙な話だった。

支配人いわ曰く、魔法使いの格好かっこうをしたその女は、訪れたそ

の日、まるで他には用はないとでも言うように、まっすぐにポーカーのテーブルに座ったそうだ。

かなりの上級者のようで、堂々とした態度をしていたとも語った。

しかし若い女の子が一人で訪れるには、カジノは少々物騒な場所だった。魔女の仮装をしている彼女は尚更、周井の目を惹いていた。

だから多くの男が、彼女と勝負をしたがった。なんなら「俺が勝つたらなんでもいうことを聞けよな……へへへ……」とかのたま言うゲス男くんも出てくる始末だったとか。

「しかし驚くべきことに、その女はただの一度たりとも負けなかつたのですよ！ 役なしなんて一度たりともなくて、

最低でもフルハウス、ごく稀まれにロイヤルストレートフラッシュを平然と出してくるのであります！ 男どもは徹底的に身ぐるみを剥はがされたであります。払える金がなくなつて下着姿のまま店から追い出された奴もいました」

「なかなか容赦ようしやないわね。グット」
「なぜか満足げに頷うなずくリリエール。

なにいつてんのきみ。

ちなみにポーカーにおける役の中で、フルハウスの難度はかなり高い。ロイヤルストレートフラッシュに至っては自分で出すことはおろか、目撃めくすることすら超希少きせう。

つまりバケモノじみた手をつかう女ということだった。ポーカーで勝てるように祈ったのかな？

「要するに、女にかかった祈りを解けば、恐らくは店の経営状況もよくなるってこと？」

「まあ恐らくはそうなるでしょうね」リリエールも同じ結論に至ったようで、僕に頷いていた。

でもつまりこれって、女の子にあんなことやそんなことをしようとした男たちが片かたっ端ぱしから痛い目に遭あってるだけだよな。

自業自得じぶうじとくだと僕思いますハイ。

しかしお店的にはやはり、女の子の一人勝ちにするよりも、あらゆる男から搾取さくしゆしたほうが得策とくさくなのだろう。

「あの女の子が現れて以来、我が店は大打撃を受けましてな。もはやポーカーの席には事情を知らない新参者しんざんものがわらず

かに座るだけ。絶対に勝ってしまう彼女のせいで、客足は遠とおのきつつありますでありますー！」

「事情は分かったわ——」リリエールはペンを走らせる手を止めた。

その一言と様子は、「面倒くさいけど仕方ねえからやっ
てやるよ」というニュアンスを存分に含んでいるように見
えて、要するに彼女が乗り気でないのは火を見るより明ら
かだった。

だから直後に浮かべた満面の笑みも、付き合いの浅い僕
ですら分かるくらいにまがい物だった。

「その女の子の件を解決をしたいのならば、とりあえず手
付金として五千万レインを頂戴ちようだい。解決したらその倍貰ばいもらう

わ」

大金吹っかけて諦あきらめさせ、あきらめる気で満みち溢あふれてあきらまいた。
しかし。

「ふむ。構わん！ ちようど手持ちが五千万レインだ」
支配人は即座にバッグをテーブルに置いて、ファスナー
を開く。

中にはお金がぎっしり。なるほど支配人が持っていたの
は五千万入るバッグだったようだ。それ裏金じゃないだろ
うな？

「ちっ。これだから金持ちは……」
支配人に聞こえないように毒づくリリエール。
乗り気じゃないにも程がある。

しかしそんな彼女に反して、僕は俄然がぜん乗り気だった。何なら今すぐにもカジノに赴おもむきたいくらいに。

「……あなたの依頼、確かに承うけたまわったわ」

テーブルのバッグを「よいしょ」と自らの足元に置いて、ため息を漏らすリリエール。

その横で、僕はひとり、うずうずとじっていた。

あ、お金がそばにあるからじゃないよ？ マジで。